

## アジア・アフリカ学術基盤形成事業 平成25年度 実施計画書

### 1. 拠点機関

日本側拠点機関：	聖路加看護大学
タンザニア拠点機関：	ムヒンビリ健康科学大学

### 2. 研究交流課題名

(和文)： タンザニアの母子保健改善に貢献する持続的な若手研究者の育成  
(交流分野： 母性看護・助産学 )

(英文)： Sustainable development of novice researchers who will contribute evidence based midwifery for the promotion of maternal child health in Tanzania  
(交流分野： Maternal Infant Nursing & Midwifery)

研究交流課題に係るホームページ：

<http://www.ap.slc.ac.jp/mt5/asia-africa-jp/about-center.html>

### 3. 開始年度

平成 23 年 4 月 1 日 ～ 平成 26 年 3 月 31 日

(3 年度目)

### 4. 実施体制

#### 日本側実施組織

拠点機関：聖路加看護大学

実施組織代表者（所属部局・職・氏名）：学長・井部俊子

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：母性看護、助産学・教授・堀内成子

事務組織：聖路加看護大学事務局

#### 相手国側実施組織（拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。）

国（地域）名：タンザニア ダルエスサラーム

拠点機関：(英文) Muhimbili University of Health and Allied Sciences (MUHAS)

(和文) ムヒンビリ健康科学大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：

(英文) School of Nursing・Dean・Sebalda LESHABARI

協力機関：(英文) Tanzania Midwives Association、Muhimbili National Hospital

(和文) タンザニア助産協会、ムヒンビリ国立病院

## 5. 全期間を通じた研究交流目標

タンザニアでは妊産婦死亡率が非常に高く、産科医療のアクセス・質の低さに関する問題が山積している。母子保健問題の改善という緊急性の高い社会的なニーズに対応すべく、母子保健を専門に研究教育活動ができる若手研究者の育成が急務であり、助産学専門の修士課程の設立が強く求められている。本研究交流では、「アジア・アフリカ助産研究センター」という共同研究拠点を形成し、交流を通して東アフリカ初となる助産学専門の修士課程をタンザニア・ムヒンビリ健康科学大学に設立する。

タンザニアと日本の助産教育の理念は、「エビデンスに基づいた安全な自然分娩を促進する」点において共通している。日本の助産高等教育は、聖路加看護大学大学院看護学研究科において、1983年度より修士課程が設けられており、助産学の教育者および研究者を数多く輩出してきた実績がある。本研究交流では、日本の持つ知識、人材や経験を移転するだけでなく、タンザニアの健康問題に合ったカリキュラム編成を行う。タンザニア国内で助産学専門の大学院教育を確立することによって、タンザニア人助産師が自国の保健問題改善に向け活動できる能力を育成し、タンザニアの母子保健分野の自立発展性を高めることを目指す。

またセミナー等学会会合を通し、設立する大学院修士課程の教員、助産師学校の教員グループや臨床現場の助産師にも学びの場を提供する。同時に日本の助産高等教育においても、助産師が国際的な視野を持ち、活動を展開する能力を養うことを目標としている。本研究交流で、日本人の若手研究者が国際的な活動の場やネットワークを広げ、今後共同研究などを行う基盤を作ることを目標としている。

## 6. 前年度までの研究交流活動による目標達成状況

### 【研究協力体制の構築状況での目標達成状況】

初年度に発足したアジア・アフリカ助産研究センターでは、ムヒンビリ健康科学大学との研究者交流を通じてお互いの文化的背景、生活・研究環境、助産教育・医療事情の実際への理解を深めることができた。

前年度は日本側研究者5名、大学院生3名をタンザニアに派遣し、相手国拠点であるムヒンビリ健康科学大学、ムヒンビリ国立病院、地方都市であるバガモヨにあるバガモヨ県立病院、バガモヨ県立看護学校、タンガ地区の農村地にあるムヘザ病院、ムヘザ看護学校、聖ラファエル病院、聖ラファエル看護学校を訪問し、都市部から農村部に渡る医療施設や教育現場を視察することができた。相手国側は訪問に当たっての調整業務に大きく貢献し、日本側研究者にとって、タンザニアの医療や看護教育の現状を学ぶ機会となった。

また、同じく平成24年度にタンザニアで開催したS-1のHumanization of Childbirthセミナーでは、相手国側研究者との協働によってお互いへの認識を深め、学び合うことができた。123名もの参加者を集めたのはタンザニア側研究者の告知努力の賜物である。一方、本セミナーにおける日本側研究者の企画・運営方法を通じて、相手国側研究者が事業マネ

ジメントを学ぶ機会を得た。またセミナーの内容に関しても、日本の助産師が行っている活動について、日本に於ける日常的な助産ケア、日本の助産師の国際協力及び研究活動と幅広い内容を共有することができ、それらの事例紹介が、タンザニアに於ける助産ケアの変革へのモチベーションとなった。

S-1 の開催後、両国の研究者でミーティングを行い、本事業の軸であるタンザニア側での助産学修士課程の発足について、カリキュラムの再編状況を話し合い、次年度の修士課程発足に向けてのプロセスを確認した。今回の訪問を通し、総じて両国の関係性を深めるに至り、本事業基盤の強化につながる経験となった。

また初年度と同様、交流活動については、アジア・アフリカ助産研究センターのホームページやニュースレターの配信、また公開セミナーや雑誌掲載によって広く周知することができた。

### 【学術面の成果での目標達成状況】

R-1 では、相手国側実施組織であるムヒンビリ健康科学大学に新規開設する助産学修士課程への承認を受けるため、相手国研究者が自大学内のカリキュラム編成担当と話し合い、修正を重ねた。現在最終版が大学に提出され、次年度秋期より開講予定である。同課程開設に先立ち、本年度はベースライン調査として、現地の臨床で活動する助産師の助産ケアに対する認識を調査した。S-1 の開催時に、タンザニア助産師を対象として”Humanization of Childbirth”、つまり出産を人間的に変革する際に必要なケアの中心概念である「女性を中心としたケア」への認識について、Women-centered care (WCC) pregnancy questionnaire を用いてセミナー前後で測定し、Mixed methods (質・量両データ) でデータ収集を行った。量データはセミナーの教育プログラムの有用性を示し、質的データはセミナー中に行った”Humanization of Childbirth”をタンザニアでどのように実現して行くかというディスカッションからのアイデアを多く含んでいた。現在質・量両データを分析中であるが、タンザニア助産師の現在の認識と、今後への行動変容の示唆を得られる結果となることが予想される。

R-2 に関しては、昨年調整した研究計画の倫理審査の提出を行った。本年度は現地での調査担当である助産師が産前産後休暇に入ったこともあり、研究の実施には至らなかったが、次年度の実施に向けて、研究者間の調整は進めている。

なお、昨年度のセミナーに参加した、日本側拠点に所属するインドネシアの助産研究者が、本事業の活動を基に自らの研究論文を発表するに至り (Yenita Agus, Shigeko Horiuchi, and Sarah E Porter: Rural Indonesia women’s traditional beliefs about antenatal care, BMC Research Notes, 2012, 5:589, doi:10.1186/1756-0500-5-589、論文に本事業の記載あり)、本事業の成果が将来的に他国への波及効果につながる第一歩となった。

本年度までの事業展開に関する報告を以下の5つ学会発表で行った。

1. Shimpuku, Y., Horiuchi, S., Leshabari, S., Malima, K., Matsutani, M., Eto, H., Nagamatsu, Y., Oguro, M. Yaju, Y. “Process Report of a Collaborative Project between Tanzania and Japan to Develop a Master's Program in Midwifery” The 9<sup>th</sup> International Conference of the Global Network of WHO Collaborating Centres for Nursing and Midwifery (Kobe, Japan) June 2012
2. Shimpuku, Y., Horiuchi, S., Leshabari, S., Malima, K., Matsutani, M., Eto, H., Nagamatsu, Y., Oguro, M. Yaju, Y. “Starting a Midwifery Master’s programme in Tanzania: Lesson learned from the collaborative project between Tanzania and Japan” The East, Central, and Southern African College of Nursing the 10<sup>th</sup> Scientific Conference (Port Louis, Mauritius) September 2012
3. Shimpuku, Y., Horiuchi, S., Matsutani, M., Eto, H., Nagamatsu, Y., Oguro, M., Iida, M., Yaju, Y., Mori, T. “Process report of the collaborative project to develop the Master’s program in Midwifery in Tanzania: The seminar of “Humanized Childbirth”” St. Luke’s Academia (Tokyo, Japan) February 2013
4. Shimpuku, Y., Horiuchi, S. “The Concept of “Humanization of Childbirth with Women-Centered Care (HC/WCC): Japanese Nurse-Midwives’ Application of the Concept to Global Health Research, Education, and Practice” the 10<sup>th</sup> Annual National Conference, Asian American Pacific Islander Nurses Association, “Global Health: Nursing in the Future- Research, Education, and Practice” (Honolulu, Hawaii) March 2013
5. 堀内成子 シンポジウム「70億人時代の国際保健医療チームの人材とその育成：リプロダクティブヘルス」第28回日本国際保健医療学会東日本地方会（東京）2013年3月  
3番目の第7回聖ルカ・アカデミアでは本事業のアウトリーチの活動が評価され、実行委員長賞を受賞することができた。

#### 【若手研究者養成での目標達成状況】

本年度、日本側研究者チームがタンザニアを訪問した際、今後国際的な助産研究に携わる意思を持つ日本側拠点機関の大学院生を3名同行させた。全員アフリカへの渡航は初めてであり、医療現場の見学や研究者との交流から、多くの学びを得ることができた。S-1のセミナーでは3人とも発表の機会を持ち、アフリカの助産師に対して英語で発表し、質疑応答するという貴重な経験を得ることができた。その成果を S-2 に於いて日本でも発表し、現地での学びを共有する経験も得た。両セミナーの運営に於いても大きな役割を果たし、帰国後のデータ管理、分析にも携わってもらうことで、研究面での学びの機会ともなった。

また、タンザニア側で S-1 に参加した多くの助産師が、今秋開講予定の助産学修士課程に進学を希望している。タンザニア側の発表の中で、学術能力に秀でている助産師も複数

名、見出すことができた。助産学修士課程の入学候補者に会い、若手研究者候補に”Humanization of Childbirth”の概念やディスカッションでの学びの機会を提供した。

### 【社会貢献での目標達成状況】

本事業の最終的な目的は、高い妊産婦死亡率の続くタンザニアにおいて、大学院教育を推進することで、助産教育を向上させ、Women-centered Care（女性中心のケア）、Evidence-based Practice（エビデンスに基づいた実践）の概念に沿った臨床助産ケアの改善と妊産婦の健康の改善をもたらすことである。なかなか改善されないタンザニアの高い妊産婦死亡率の問題は、臨床的なケアの質の問題にとどまらず、女性のジェンダーの問題、貧困、教育といった様々な因子が入り組んでおり、一朝一夕に解決するものではない。持続的にこの問題に取り組んでいくには、現地の助産・リプロダクティブヘルス研究者の育成が急務であり、点から面への支援体制につなげるため、継続的に人材を育成していく必要がある。

今年度 S-1 で行ったセミナーでは、助産学修士課程が国内に開設されたらすぐにでも進学したい意思のある助産師に多く出会うことができた。現場で働く助産師たちも、ケアの変革を求めて病院のマネージャーや政策立案者と話し合い、意見を出していく中で、研究によるエビデンスを提示することの必要性を感じており、修士課程で学ぶことの必要性を感じていた。先進国の経済成長率が低下する中、海外からの奨学金支援による留学の機会は減る一方であり、国内で若手研究者を育成する必要性が高まっている。

また、S-1 セミナー参加者から、タンザニアにおいて“助産師は冷たい人”とのイメージが持たれている現状に対し、業務多忙や人材・設備不足の状況下であっても、ケアの精神を忘れず実践することが重要であり、社会の助産師イメージを変えることにつながるという発言が寄せられた。セミナー開催を通じ、助産師は高学歴であると同時に人々に寄り添う援助者である、という概念をセミナー参加者にもたらしたことが成果として挙げられる。

本年度、相手国側代表の Dr. Sebalda Leshabari が学部長に選任され、助産学修士課程の大学への申請プロセスを直接行う立場になった。3月に最終申請を済ませており、平成25年秋より開始予定であることを確認している。実際に開始すれば、タンザニア助産師に限らず、東アフリカ周辺諸国全体に大きなインパクトを与える社会貢献となる。

## 7. 平成25年度研究交流目標

※本事業の目的である「研究協力体制の構築」「学術的観点」「若手研究者育成」に対する今年度の目標を設定してください。また、社会への貢献や、その他課題独自の今年度の目的があれば設定してください。

### 【研究協力体制の構築】

昨年度は日本側研究者がタンザニアを訪問し、施設見学や現場で働く助産師とのディスカッションを通し、タンザニアの助産の現状についてチーム全体で理解を深めることができた。また、助産師たちの女性を中心としたケアへの認識への調査を行うことができ、量・質データを両国間で分担し、共に分析を進めている。今年度は再び相手国側からの招聘を行い、修士進学予定者2名、修士課程での臨床実習を担当するムヒンビリ国立病院の看護部長を招聘し、タンザニア助産学修士課程第1期生候補者と、それを支えるスタッフのモチベーションを高める。

また、今年度は研究事業として R-2 の継続にあわせ、新たに R-3 を立ち上げる。研究活動の現地サポートを相手国側に依頼し、実質的な研究協力を通じた体制の強化を行っていく。

### 【学術的観点】

R-1 では助産学修士課程の開始を予定している。同課程へ進学する第1期生は、タンザニアの母子保健の今後を担う重要な人材となる。カリキュラムは同課程在籍学生が教育者、高度実践家、管理者、研究者といった選択肢を選ぶことができるよう、幅を持たせた豊富な内容となっているが、今後第1期生がどのようにリーダーシップを発揮し、キャリアを構築していくかに着目し、修士課程の評価を行っていく必要がある。そのベースラインとして、進学前の若手研究者のリーダーシップ、キャリア構築への意識調査を行う。

R-2 では、担当研究者の出産により延期していた思春期学生への性教育プログラムの農村部での実施と評価を行う。

また、今年度新たに R-3 を立ち上げ、タンザニアにおける助産師の出産ケアに対する認識について、助産師が日々の実践の視点から何に困難を感じ、どのように臨床判断をしているのかを掘り下げる研究を行う。そのための倫理審査とデータ収集、分析、論文執筆を行う予定である。

あわせて、事業の最終年度を迎えるにあたり、プロジェクト評価を含めた事業活動報告をまとめ、論文として学術雑誌に投稿し、プロジェクトの成果を幅広く周知する。

### 【若手研究者養成】

今年度はタンザニアの若手研究者を日本に招聘し、日本の修士課程科目聴講や特別講義の機会を提供する。また、聖路加産科クリニックの見学を通し、日本の助産実践の現場から、助産師主導型ケア、継続ケアの学びを深めてもらう。このような機会を持つことで、将来、タンザニアの母子保健を率いて行く人材として、助産師としてのリーダーシップを発揮するイメージが持てるよう導く。

また、日本側研究者チームも、前年度に引き続き自校大学院生をタンザニアに同行させ、国際保健での研究活動を希望する院生に対しては、研究活動に参加する機会も提供し、若手研究者養成の機会とする。大学院生にとって、アフリカでの研究を経験できる貴重な機会となる。

### 【社会貢献】

タンザニアで待ち望まれている助産学修士課程を設立することで、助産師に大学院教育の機会を提供する。国内でのプロフェッショナルディベロップメントの機会ができることで他国への頭脳流出（ブレインドレイン）を予防し、優秀な人材が国内での教育、研究、実践、管理、政策提言等幅広く活躍することを促す。実践面では、タンザニア国内の助産実践に従事している助産師・看護師等のケアレベルの向上を図ることにより母子保健に貢献することを目指す。教育面では、助産の高等教育である大学院教育(修士課程)を開講することで、多様な現任教育のプログラムの開発や博士課程の開設に向けたさらなる可能性を開く。研究面では、大学院における研究活動が実践を変革し、よりよい母子保健の成果につながると予測する。

優秀な人材の貢献でより国民のニーズに基づいた政策立案、医療改善がなされることにより、国民への利の還元となることが期待できる。

## 8. 平成25年度研究交流計画状況

### 8-1 共同研究

—研究課題ごとに作成してください。—

整理番号	R-1	研究開始年度	平成23年度	研究終了年度	平成25年度
研究課題名	(和文) タンザニアの助産若手研究者育成カリキュラム作成と評価 (英文) Curriculum development and evaluation of novice midwifery researchers in Tanzania				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 堀内成子・聖路加看護大学・母性看護、助産学・教授 (英文) Shigeko Horiuchi, St. Luke's College of Nursing, Maternal Infant Nursing & Midwifery, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・ 職	Sebalda Leshabari, Muhimbili University of Health and Allied Sciences, School of Nursing, Dean				
参加者数	日本側参加者数	7名			
	タンザニア側参加者数	5名			
25年度の 研究交流活動 計画	<p>昨年度タンザニアでデータ収集した「女性を中心としたケア」に対する助産師の認識を分析し、5月に金沢で行われる日本助産学会学術集会にて発表する。また、内容を論文にまとめて発表する。</p> <p>ムヒンビリ健康科学大学に於いて、国内初となる助産学修士課程を開始するに際し、第1期生のリーダーシップ、キャリア構築に関するインタビューを行う。</p> <p>タンザニアからムヒンビリ国立病院の看護部長を招聘し、日本の助産学修士課程や助産ケアを理解してもらい、カリキュラムの遂行時に協力を願う。</p>				
25年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	<p>① タンザニアにおける「女性を中心としたケア」に対する助産師の認識が明確になり、国際協働研究を日本の助産研究者と共有することができる。</p> <p>② ムヒンビリ健康科学大学における助産学修士課程第1期生のリーダーシップ、キャリア構築の現在の認識を理解することができる。課程修了後の認識と比較するため、ベースラインデータとして保存する。</p> <p>③ ムヒンビリ健康科学大学における助産学修士課程には、上級実践を学ぶための臨地実習が含まれるが、それに直接的な権限を持つ看護部長の協力を得ながら実習を行うことができる。</p>				



整理番号	R-2	研究開始年度	平成 23 年度	研究終了年度	平成 25 年度
研究課題名	<p>(和文) タンザニアの思春期男女への性教育プログラムの評価：都市部と農村部の比較</p> <p>(英文) Sex education program for adolescent boys and girls in Tanzania: A comparative study between city and rural areas</p>				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	<p>(和文) 堀内成子・聖路加看護大学・母性看護、助産学・教授</p> <p>(英文) Shigeko Horiuchi, St. Luke's College of Nursing, Maternal Infant Nursing &amp; Midwifery, Professor</p>				
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	Sebalda Leshabari, Muhimbili University of Health and Allied Sciences, School of Nursing, Dean				
参加者数	日本側参加者数	4 名			
	タンザニア側参加者数	1 名			
25年度の 研究交流活動 計画	<p>本年度は思春期の性教育プログラムを農村部で実施し、評価研究を行う。研究者協力者と打ち合わせ、数回に渡ってプログラムの実施と評価を行い、そのうち1回は7月の研究者交流でのタンザニア訪問と重なるように調整し、日本側研究者もデータ収集や評価に立ち会えるように計画する。分析後に論文にまとめ、研究者協力者が以前に行った都市部での教育プログラムの結果と比較する。</p>				
25年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	<p>① 性教育プログラムを実施し、評価研究のデータ収集、分析を行うことで、農村部における思春期男女のリプロダクティブヘルスに関する考え、態度、行動が明らかになる。</p> <p>② タンザニア側の担当する若手研究者にとって、日本との協働で研究活動を継続する機会となり、本事業の目的である母子保健に貢献する人材育成につながる。</p> <p>③ 日本側研究者もデータ収集に参加し、タンザニアの農村部の思春期の少年・少女に対する性教育の現場を見学させてもらい、現場を理解した上でデータ分析に携わる。特に若手研究者には国際協働で行われる研究活動の実際に携わる機会となり、将来の国際的活動に向け、コンピテンシーを高めることができる。</p>				

整理番号	R-3	研究開始年度	平成 25 年度	研究終了年度	平成 25 年度
研究課題名	(和文) タンザニアでの出産ケアに対する助産師の認識調査				
	(英文) Midwives' Perceptions of Childbirth Care in Tanzania				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 堀内成子・聖路加看護大学・母性看護、助産学・教授				
	(英文) Shigeko Horiuchi, St. Luke's College of Nursing, Maternal Infant Nursing & Midwifery, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・ 職	Sebalda Leshabari, Muhimbili University of Health and Allied Sciences, School of Nursing, Dean				
参加者数	日本側参加者数	3 名			
	タンザニア側参加者数	1 名			
25年度の 研究交流活動 計画	<p>タンザニアで働く助産師が出産ケアに対してどのような認識を持っているのか、特に医師への相談機会が少ない中で、助産師が困難な事例の分娩進行や異常の臨床判断をどのように行っているのか、プロフェッショナルとしての職業価値も含め、インタビューを通して助産師の認識を調査する。特にリスクが生じて搬送を判断するに至る事例を集積することも計画中である。事前にムヒンビリ健康科学大学、聖路加看護大学の両倫理審査委員会から許可を得る。</p>				
25年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	<p>① インタビューを通じて助産師の臨床判断を語る機会を持つことで、データ収集のみならず、タンザニア助産師たちが仕事の困難や工夫を共有し合える場ともなる。</p> <p>② タンザニアの臨床場面の強み、限界を示すことで、タンザニア助産師の臨床活動を支持し、改善を目指す助産師に有益となるエビデンスを構築することができる。</p> <p>③ 日本側研究者、特に機会を与えられる若手研究者にとって、タンザニアとの共同研究に携わることにより、相手国のためになる国際共同研究について思慮し、国際協働におけるコミュニケーションを学ぶ機会となる。</p> <p>④ 交流を通し、相手国との信頼関係を深めることができる。</p>				

## 8-2 セミナー

—実施するセミナーごとに作成してください。—

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業「タンザニアの看護・助産ケアの実際：実践家の視点から」 (英文) JSPS AA Science Platform Program “Nursing and Midwifery Care in Tanzania: Practitioners’ Perspective“
開催期間	平成 25 年 5 月 末日 ~ 平成 25 年 5 月 末日 (1 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) 日本、東京、聖路加看護大学 (英文) Japan, Tokyo, St. Luke’s College of Nursing
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・聖路加看護大学・母性看護、助産学教授 (英文) Shigeko Horiuchi, St. Luke’s College of Nursing Maternal Infant Nursing & Midwifery, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文)

### 参加者数

派遣先 派遣	セミナー開催国 (日本)	
	A.	B.
日本 〈人／人日〉	A.	16 / 16
	B.	20
タンザニア 〈人／人日〉	A.	3 / 3
	B.	0
〈人／人日〉	A.	
	B.	
合計 〈人／人日〉	A.	19 / 19
	B.	20

- A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)  
B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

セミナー開催の目的	<p>本年度は新たに開始する助産学修士課程進学予定者2名（現在ムヒンビリ国立病院助産師）と、ムヒンビリ国立病院看護部長の3名を招聘し、実践家の視点からタンザニアの看護・助産ケアの実際や、病院で働いている実情を聞く機会を持つ。タンザニアは医療者不足が深刻であるが、医師不足であるが故に助産師の実践範囲が日本よりも広い（会陰切開や縫合、異常時の処置など）。日本側研究者やその他参加者が、タンザニアの医療に関する理解を深め、グローバルな視点で自らのケアを振り返る機会を持つ。</p>	
期待される成果	<p>① タンザニアの出産に関しては、研究でも情報が限られており、日本側参加者にとって、実際に現在臨床に従事している看護師、助産師の話を知ることができる貴重な機会となる。</p> <p>② 招聘するタンザニア側若手研究者に発表の機会を与えることで、異文化の外国人に対し、英語で発表する貴重な経験となる。</p> <p>③ 参加者からの質疑・応答を通じ、タンザニアの看護・助産ケアについて討論し、課題・問題点のみならず、タンザニア医療者の強みや日本へ応用したい技術を考えることができる。</p> <p>④ 今回は助産に特化せず、タンザニアの看護部長の看護管理の視点も含んだセミナーとするため、助産師に限らず看護の幅広い分野の学生、専門家に参加を募り、タンザニアの医療やプロジェクトに関する意見を交換する。</p>	
セミナーの運営組織	聖路加看護大学参加研究員、事務局	
開催経費 分担内容 と概算額	日本側	<p>内容 その他経費 金額 10,000 円 (R-1 での招聘時に開催するため、旅費は S-1 として計上せず)</p>
	タンザニア側	<p>内容 【負担なし】</p>

整理番号	S-2
セミナー名	(和文) 日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業「ムヒンビリ健康科学大学における助産学修士課程のキックオフ」 (英文) JSPS AA Science Platform Program “Kick off of the Midwifery Master’s Program in Muhimbili University of Health and Allied Sciences“
開催期間	平成 25 年 11 月中旬 ～ 平成 25 年 11 月中旬 (1 日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) タンザニア、ダルエスサラーム、ムヒンビリ健康科学大学 (英文) Tanzania, Dar es Salaam, Muhimbili University of Health and Allied Sciences
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・聖路加看護大学・母性看護、助産学・教授 (英文) Shigeko Horiuchi, St. Luke’s College of Nursing, Maternal Infant Nursing & Midwifery, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Sebalda Leshabari, Muhimbili University of Health and Allied Sciences, School of Nursing, Dean

参加者数

派遣先 派遣		セミナー開催国 (タンザニア)
日本 〈人／人日〉	A.	3/ 3
	B.	5
タンザニア 〈人／人日〉	A.	7/ 7
	B.	20
〈人／人日〉	A.	
	B.	
合計 〈人／人日〉	A.	10/ 10
	B.	25

- A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)  
B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>日本側拠点との国際協働で作上げたカリキュラムにより、<b>Evidence-based practice</b> と <b>Women-centered care</b> の概念に基づく助産学修士課程が、タンザニアの随一の国立医療系大学、ムヒンビリ健康科学大学にてスタートする。</p> <p>助産学修士課程の開始に際し、大学内外関係者を招待したキックオフセミナーを開催することで、タンザニアと日本との協働関係の上に築くことができた国内初の助産学修士課程を幅広く周知する。</p>		
<p>期待される成果</p>	<p>① 国内初となる助産学修士課程の開始に際し、ここまでに至るタンザニア側と日本側研究者の協働の過程を周知することができる。</p> <p>② 初年度に会議に集ってもらった、WHO、UNFPA、看護・助産協会、医師会、他の教育機関のステークホルダーに、助産学修士課程の開始を報告することにより、国内外に認められた助産学修士課程となる。国内初の助産学修士課程となるため、認められることで、修了後の院生の就職などにも協力を促すことができる。</p> <p>③ JICA タンザニア事務局、日本大使館といった在タンザニア日本機関のスタッフを招待し、協力関係を構築することで、修士課程への JICA 職員・専門家・青年海外協力隊による授業参画や日本側研究者滞在に対する支援、より広い対象者への事業の周知といった、事業の遂行に関するサポートを得ることが期待できる。</p>		
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>聖路加看護大学参加研究員、事務局 ムヒンビリ健康科学大学参加研究員、事務局</p>		
<p>開催経費 分担内容 と概算額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 外国旅費 その他経費 合計</p>	<p>金額 900,000 円 100,000 円 1,000,000 円</p>
	<p>タンザニア側</p>	<p>内容 その他経費</p>	<p>10,000 円</p>

### 8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

所属・職名 派遣者名	派遣・受入先 (国・都市・機関)	派遣時期	用務・目的等
ムヒンビリ国立病院・看護部長・Agnes Mtawa	日本、東京、 聖路加看護大学	平成25年 5月末日	日本の助産学修士課程への参加、教員や学生との交流、産科クリニック見学を通し、日本の助産教育、実践に対する理解を深める。
ムヒンビリ国立病院・助産師・Christina Mwandalima	日本、東京、 聖路加看護大学	平成25年 5月末日	日本の助産学修士課程への参加、教員や学生との交流、産科クリニック見学を通し、日本の助産教育、実践に対する理解を深める。
ムヒンビリ国立病院・助産師・Mugara Mahungururo	日本、東京、 聖路加看護大学	平成25年 5月末日	日本の助産学修士課程への参加、教員や学生との交流、産科クリニック見学を通し、日本の助産教育、実践に対する理解を深める。
聖路加看護大学・准教授・長松康子	タンザニア、 ダルエスサラーム、ムヒンビリ健康科学大学	平成25年 7月上旬	ムヒンビリ健康科学大学教員、学生との交流、ムヒンビリ国立病院、バガモヨ県立病院の見学から、タンザニアの助産教育、実践に対する理解を深める。
聖路加看護大学・助教・新福洋子	タンザニア、 ダルエスサラーム、ムヒンビリ健康科学大学	平成25年 7月上旬	ムヒンビリ健康科学大学教員、学生との交流、ムヒンビリ国立病院、バガモヨ県立病院の見学から、タンザニアの助産教育、実践に対する理解を深める。
聖路加看護大学・博士課程前期・田中菜央	タンザニア、 ダルエスサラーム、ムヒンビリ健康科学大学	平成25年 7月上旬	ムヒンビリ健康科学大学教員、学生との交流、ムヒンビリ国立病院、バガモヨ県立病院の見学から、タンザニアの助産教育、実践に対する理解を深める。

聖路加看護大学・博士課程前期・糸川愛子	タンザニア、ダルエスサラーム、ムヒンビリ健康科学大学	平成25年7月上旬	ムヒンビリ健康科学大学教員、学生との交流、ムヒンビリ国立病院、バガモヨ県立病院の見学から、タンザニアの助産教育、実践に対する理解を深める。
聖路加看護大学・博士課程前期・山田律子	タンザニア、ダルエスサラーム、ムヒンビリ健康科学大学	平成25年7月上旬	ムヒンビリ健康科学大学教員、学生との交流、ムヒンビリ国立病院、バガモヨ県立病院の見学から、タンザニアの助産教育、実践に対する理解を深める。
聖路加看護大学・博士課程前期・柘谷香奈	タンザニア、ダルエスサラーム、ムヒンビリ健康科学大学	平成25年7月上旬	ムヒンビリ健康科学大学教員、学生との交流、ムヒンビリ国立病院、バガモヨ県立病院の見学から、タンザニアの助産教育、実践に対する理解を深める。
聖路加看護大学・博士課程前期・阿南早季	タンザニア、ダルエスサラーム、ムヒンビリ健康科学大学	平成25年7月上旬	ムヒンビリ健康科学大学教員、学生との交流、ムヒンビリ国立病院、バガモヨ県立病院の見学から、タンザニアの助産教育、実践に対する理解を深める。
聖路加看護大学・博士課程前期・倉橋孝江	タンザニア、ダルエスサラーム、ムヒンビリ健康科学大学	平成25年7月上旬	ムヒンビリ健康科学大学教員、学生との交流、ムヒンビリ国立病院、バガモヨ県立病院の見学から、タンザニアの助産教育、実践に対する理解を深める。



## 9. 平成25年度研究交流計画総人数・人日数

### 9-1 相手国との交流計画

派遣先 派遣	日本 〈人/人日〉	タンザニア 〈人/人日〉	〈人/人日〉	合計 〈人/人日〉
日本 〈人/人日〉		12/ 142 ( )	( )	12/ 142 ( 0/ 0 )
タンザニア 〈人/人日〉	3/ 27 ( )		( )	3/ 27 ( 0/ 0 )
〈人/人日〉	( )	( )		0/ 0 ( 0/ 0 )
合計 〈人/人日〉	3/ 27 ( 0/ 0 )	12/ 142 ( 0/ 0 )	0/ 0 ( 0/ 0 )	15/ 169 ( 0/ 0 )

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流する人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。(合計欄は( )をのぞいた人数・日数としてください。)

### 9-2 国内での交流計画

1/2 〈人/人日〉
------------

10. 平成25年度経費使用見込み額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	80,000	国内旅費、外国旅費の合計は、研究交流経費の50%以上であること。
	外国旅費	4,260,000	
	謝金	100,000	
	備品・消耗品購入費	200,000	
	その他の経費	110,000	
	外国旅費・謝金等に係る消費税	0	
	計	4,750,000	研究交流経費配分額以内であること。
業務委託手数料		475,000	研究交流経費の10%を上限とし、必要な額であること。また、消費税額は内額とする。
合計		5,225,000	